

## 異年齢のかかわりを促す園環境の構成

小方, 信二  
第二赤間保育園

<https://doi.org/10.15017/26724>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 12, pp.11-23, 2012-01-20. 日本生活体験学習学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 異年齢のかかわりを促す園環境の構成

小 方 信 二\*

## Structure of the Nursery School Environment to Enhance Inter-Generational Relationships

Ogata Shinji\*

**要旨** 集団保育を営む保育園においては、子どもたちの生活する拠点（昼間の大きなお家）として、まずは日々の生活を営む暮らしの場として保育園で過ごす時間を家庭で過ごす時間と同じように安心してくつろげる場でなければならない。縦割り保育を実践する日常性において、手をつなぎ傍らに寄り添い、あたたかく見守る、さまざまな年齢の枠を越えたほほえましい風景が展開されており、まるで本当の「きょうだい」であるかのような縦の関係が営まわれている。かつては、家庭という家族構成において本当の兄弟姉妹という縦関係を構成する社会があり、その基盤を中心とした地域社会における異年齢集団の関わりのなかで社会性や遊びの伝承などの関係ははぐくまれていた。しかし、年上の子どもが年下の子どもの面倒を見るという、あたりまえの自然な人間関係が今日、希薄になっている。保育所という異なる年齢構成の子どもたちが生活と遊びを営む保育環境において、「縦割り保育」の保育形態が及ぼす保育効果として幼児期の望ましい「社会的態度」と「生活態度」を創生することが期待される。

**キーワード** 縦割り保育、異年齢、社会的態度、生活態度、自己肯定感

### 1. はじめに

少子化が進む中、地域や家庭で子ども同士の関係を築くことが難しくなっている今日において、子どもたちが関わり合いの中で育つ大切な機会が失われてきており、とくに縦関係の体験不足が心配される。かつては、家庭という場に密度の濃い異年齢関係である「きょうだい」があり、地域にはそれを基盤とした広がりのある大きな異年齢集団でのあそびの伝承や創生がなされ、多様な人間関係を体験することで自然な社会性の育ちが培われる豊かな環境があった。年上の子どもが年下の子どもの面倒を見るという、この当たり前前の自然な人間関係が希薄になった今日、保育所が日々の暮らしの場として、一緒に食べ、ぐっすり眠り、いっぱい遊び、園生活をともに寄り添い支え合う生活が営まれる場として重要である。

子どもたちが異年齢でのさまざまな立場を経験す

ることによって、年上児への憧れや同一化、頼り頼られる充実感や信頼感など守り守られる関係性のなかで育まれる年齢を越えた心のつながりを重視した異年齢保育の在り方について考えてみたい。

### 2. 異年齢保育に期待される育ちと視点

家庭や地域で異年齢の子どもとかがかわることが難しくなり、人間関係の変容していく現代の子どもたちに、長期間そして長時間にわたり保育所で生活する子どもたちの保育環境を鑑み、異年齢保育が新しい視点として、子どもの内面的な育ちにとって大切な幼児期に育んでほしい望ましい態度として「社会的態度」と「生活態度」の二つの視点を重点において考える。

最初に、望ましい社会的態度としては（思いやり、いたわり、あこがれ）などの人とのかかわりのなか

\*連絡・別刷り請求先

連絡先：第二赤間保育園（宗像市広陵台1丁目8-4 TEL：0940-34-1202 FAX：0940-34-1202）

E-mail：akaho\_2@blue.ocn.ne.jp

で育まれる力である。千羽ら（2005）は、相手に思いを遣る「思いやり」を「相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む心」（千羽ら、2005）と定義し、「思いやり」の発達には、情緒の安定として乳児期からの受容される体験や経験、「自己受容」「自己主張」「自己実現」「葛藤体験」を経ながら発達すると指摘している。2つ目は、生活態度として人間が毎日コツコツと積み重ねた体験を通して培われた「生活習慣能力」である。生活習慣、片付け、生活の中のルールなどの生活の仕方は、保育士の指示に従ってただやればよいというのではなく「自分のもの」として主体的に自ら取り組もうとする“自立への意欲”を育むことが大切である。生活習慣を育む為の生活態度を養う場としての保育園は、日常生活において異なる年齢の子どもの生活行動を観察し模倣することで自ら主体的に習得できる重要な園環境である。

### 3. 異年齢保育の方法

#### (1) 異年齢保育形態の在り方

異年齢保育は、年齢の異なる子どもたちがともに活動をする保育のことを言う。縦割り保育と言っても、クラスが異年齢で固定的な編成になっている場合や設定保育の内容や活動の種類による編成、保育活動の時間帯による編成などその方法はさまざまである。当園は、平成13年4月に60名定員で開園し、平成23年4月現在では90名定員の105名で10年目を迎える。

#### (2) 異年齢児クラス編制と人数配置

異年齢児クラスの編制は子どもの年齢・発達・興味などの個人差が大きく複数担任制が望ましいと考える。また、保育所は最低基準に基づいた面積や職員配置をおこない、子どもの人数配置は表1に示す通りである。クラス編制については、毎年クラスの入替わりを実施している。3年間固定した継続的クラス編制と単年毎にクラス分けして入れ替わりをする考え方があるが、当園においては年齢の異なる友だちとの直接的な関係や、新たな先生との関係など対人的な環境への適応は固定した継続的編制ではなく単年度毎のクラス分けを実施している。

子どものクラス編制については、前年度担任及び

次年度担任が配慮事項を考慮しながらカンファレンスを実施し、子どもがおかれている家庭での諸事情による家庭環境や、そのことで見られる子どもの心理的な情緒面の変化、また、保育園での集団生活における友だち関係などの相互の関係にも影響を及ぼすことが考えられるため特別な配慮も必要とされる。異年齢での保育環境への進級にあたっては、なによりも新たな保育環境のなかで安心して生活を送れることを優先とする。保育室やさまざまな遊具・教具などの物理的な環境変化に比較的時間がかかるので、子どもたちの環境移行による心理的变化に十分な配慮をおこないながらクラス編制する必要がある。単年度のクラス替えの保育効果としては、保育室や人数編制など物理的な環境が違うことにより、新たな人間関係の形成や新奇な環境に対する自信に繋がることを期待するからである。しかしながら、子どもの現状によっては、結果的に3年間慣れ親しんだ保育環境で過ごすことが必要と考えられる場合もある。

#### 【クラス分けの配慮事項】

在園児について

- ・前年度の1年間の子どもの生活状況
- ・縦年齢と横年齢の友だち関係
- ・兄弟関係など新たな生育歴を踏まえた家庭環境

新入園児について

- ・家庭の養育環境
- ・兄弟児の有無
- ・集団生活の有無と集団生活への適応性など

保育室について

・物理的な保育室の空間を考慮し、広い保育環境のばんだ組への配慮としては、ゆったりとした子ども（たくさんの子どもたちと生活することで刺激され自ら積極的に生活態度が促されることを期待される子ども）、いろいろな友達とかかわる経験をしてほしい子ども、人数が多くても自分のペースで生活できる子どもなどを考慮している。狭い保育環境のこあら組への配慮としては、少ない人数のなかで自己発揮できる子ども、積極的に人間関係を深めてもらいたいと願う子ども、集中力に欠けたり落ち着きの少ない子どもが少ない人数構成のなかで落ち着いて生活できることを考慮している。



異年齢で食事をとる。給食時では5歳児がエプロン、三角巾で衛生的に身にまとい、配膳の準備の当番活動を担う。仕事内容は、各テーブルの消毒殺菌、配膳された普通食（おかず）の配列や除去食の管理、おかわりの手伝い、台布きんや雑巾バケツなどの後片付け、洗濯板を使ってエプロン洗濯などの生活に必要な当番活動をおこなう。一人ひとりの配膳時の準備として、炊き立てのご飯を子どもたちはその日の体調や空腹感を感じ取りながら、おひつからしゃもじを使って自分の必要量を盛る。3歳児にとっての4月当初はまだ手元がおぼつかない様子がみられるが、あせらずゆっくりと経験を積むことによって確かなものとなっていく。3歳児は、2歳児の単独クラス編制のときから異年齢保育へのウォーミングアップとして適宜縦割りクラスへ移行保育に必要な経験を積んできてはいるものの3歳児の年度当初においては、生活の自立を優先にゆっくりと丁寧に生活を進めていくことに心がけている。このような生活リズムのなかで時間のかかる3歳児のために4、

#### 4. 異年齢保育の環境づくり

##### (1) 異年齢保育での保育活動の在り方

幼児期は生活やあそびのなかで、自分の欲求や興味に基づいて、自ら主体的に周囲の環境とかかわり、直接的・具体的な体験を通して充実感を体験することが、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度が培われる大切な時期であると考える。

・生活活動（ルーティン）と日課は、異年齢で営まれ、食事は、ランチルームにおいて3,4,5歳児が

表1 異年齢保育形態と各クラスの年齢構成

異年齢児保育形態	クラス名	総計(108名)	年齢構成(内訳人数)
基本的異年齢形態	ひよこ組	(17名)	0歳児(4名)・1歳児(13名)
	りす組	(21名)	2歳児(21名)
	こあら組	(26名)	3歳児(7名)・4歳児(9名)・5歳児(10名)
	ぱんだ組	(44名)	3歳児(13名)・4歳児(15名)・5歳児(16名)
総合縦割保育形態	ひよこ組	(27名)	0歳～5歳
	りす組	(27名)	0歳～5歳
	こあら組	(27名)	0歳～5歳
	ぱんだ組	(27名)	0歳～5歳



5歳児のゆったりと穏やかな見守りが感じられる。決められた座席はなく長椅子に席をもやいしながらお茶をくんであげたり、同席した子どもたち同士気配りする姿がほほえましく観察され、「ごちそうさま」は各自のペースで行い、配膳の片付けにおいてコップや箸箱を上手く包めない年下の子に包み方を教えてあげる姿もみられる。エプロンと三角巾をまもって配膳のお手伝いをする5歳児の姿に年長児としての活動への憧れといつかやりたいという期待を膨らませている。

日課を通しての学び合い

子どもが保育園で規則正しい生活リズムを身につけて過ごすことは大切なことであり、手洗いやうが

い、歯磨きや午睡の身支度など自分の身辺処理がきちんとできる基本的な生活習慣の自立にむけた生活の営みが求められる。毎日の日課である雑巾がけでは、4月当初において、最年長に進級した5歳児、一つ進級した4歳児ともに何事にもやる気が見えるこの機会を捉えて活動し、3歳児にとっては雑巾の絞り方、床を拭く仕方など観察学習する機会となり、見よう見真似で雑巾を絞る姿が観察される。ひと月を過ぎるころ、自分もやってみたいと思う意欲が芽ばえる頃に5歳児とペアを組み雑巾がけをおこなう。上手な絞り方や床目に沿った正しい拭き方などを学びながら上手な年長児に憧れをいただきながら次第に上達していく。今では家庭でなされない雑巾がけを通して自分たちが日頃から生活している生活空間の衛生的な維持・管理という役割も意識する。このような生活の様子は、トイレのスリッパをきちんと並べてみたり、午睡時の布団敷きや布団干しなど、子どもたちが日々の生活のなかで繰り返し積み重ねられることで自然と身についていく生活習慣能力と考える。保育士による具体的な生活指導は最低限に抑え、年上の子どもが年下の子どもにとって単に憧れの対象として存在しているのではなく、集団で生活を営むうえでの基本的な生活指導の先生としての存在でもある。

表2 保育園での一日の流れと保育形態

時間	ひよこ組		りす組	ぱんだ・こあら組
	0歳児	1歳児	2歳児	3・4・5歳児
7:00	順次登園・視診・検温(0歳児) 自由遊び(全異年齢児)			
	自由遊び(0・1・2歳児)		自由遊び(3・4・5歳児)	
8:00	自由遊び(全異年齢児)			
9:00	片付け・体操			
9:30	離乳食	おやつ	おやつ	生活活動
10:00	ミルク	保育活動	保育活動	保育活動
	あそび			
11:15	午睡	給食	給食	給食
11:30				
12:30		午睡	午睡	午睡
13:00				
14:00	離乳食			
15:00		おやつ	おやつ	おやつ
	自由遊び(全異年齢児)			
17:00	順次降園			
18:00	自由遊び(0・1・2歳児)		自由遊び(3・4・5歳児)	
19:00	延長保育(全異年齢児)			

### 設定保育活動と行事保育活動

設定保育活動においては、登園後の朝の保育を異年齢でつどい、歌やリズム遊びを通してクラスのコミュニケーションを図る。子どもたちのその日の状態を確認しながら、保育活動へ移行する。設定保育活動での保育は異年齢で取り組む課題保育が基本となっているが、同年齢での活動が望ましい保育活動や個人の自発的な活動を尊重した選択的保育も実践する。具体的に音楽リズムや表現活動、絵画製作や造形活動、ごっこ遊び（象徴遊び）やクッキング活動などは主に異年齢で取り組む。さらに、役割遊びや協同製作、文字活動、ハーモニカやピアノ等の音楽活動、作法を有するお茶会、組み体操等の運動遊びなど、学習並びに技術の習得を目的とする保育活動や協同的な役割意識を期待する保育活動については同年齢で実施する。「行事保育活動」については、表3に示すように、その保育活動のねらいによって、異年齢活動で実施したり、同年齢活動で取り組んだりする。

運動会や発表会は、保護者に「見せる」という要素の強い行事としてとらえがちであるが、それと同時に、それぞれの年齢の子どもたちの成長の「節目」としてとらえることを大切に考えなければ無理な緊張や強制のつよい活動になりかねない。子どもたちが日々の練習の取り組みのなかで充実感や達成感が積み重ねられ、日常の保育の延長線として「ふだん着の発表会・運動会」でなければと考える。

野外体験活動であるチャレンジキャンプでは、5歳児の子どもたちの自立心を養う目的で10月に実施している。保護者の参加はなくすべて子どもたち自身で取り組むことが基本とし、炊飯用の釜戸をつくり、薪をくべ、マッチを使って火を起こす体験を経験する。この過程ですでに子どもたちは、第二赤間保育園が考える子どもたちの育ちにとって大切にしたい思いの一つがプログラムされている。日常の生活では体験しない火を用いるという非日常的な体験である。子どもたちは失敗経験を積み重ねることで試行錯誤しながら必要な知識を体得していく。王丸キャンプでは、テントを設営し、炊飯のためのかまどに火を起こし、飯盒で飯を炊く。みんなが協力し、自分の役割をしっかりとこなさなければいつまでたってもご飯を食べることはできない。

子どもたちは保育園や家庭では経験することのな

い、ひもじさや不自由さを体験する。いっぱい遊んだ後ようやくできた食事を話もせず無心に摂る。残飯などなく、普段食の細い子でさえお代わりをする。木々のざわめきや風の音を聴き、草花の香りを嗅ぎ、火の暖かさや明るさ感じながら、傾く夕日を眺める。夜空に輝く星や月あかりのなかで今日のできごとを語りあう一刻。たっぷりとおるようで無い時間。管理されない時間はあっという間に過ぎていく。子どもたちが自然のなかで体験するこの活動を通して、一見無駄に見えたり不便に思えたりする非効率な体験を経験することで、子どもたちが協力



表3 年間行事

月	活動	対象年齢	内 容
4月	入園式	全児親子	ホールにて全児親子で入園式を行い、懇談を各クラスで行います。
	花祭り	4歳児	近くの浄蓮寺にお参りに行き、お釈迦さまに甘茶をかけ、甘茶をいただきます。
	新立山のぼり (3日間)	4,5歳児	4,5歳児を異年齢グループを3グループに分け実施します。
	弁当の日 (年間4回)	異年齢	年間4回保護者からの手作り弁当を持って、近くの公園や園庭などで食べます。異年齢の組み合わせは随時異なります。
	誕生会(月1回)	異年齢	全園児で行う。催し物は内容で未満児の参加を決定します。
5月	お茶会 (一人年間4回)	3,4,5歳児 (同年齢)	各年齢の年間計画にそって行う。同年齢を2グループに分け、元保護者よりご指導いただきます。
	真愛保育園交流会	5歳児	福津市若木台の真愛保育園の5歳児と遊びを通して交流を深めます。
	赤間保育園交流会 (年間4回)	5歳児	姉妹園としてそれぞれの保育園や園外で交流します。計画はお互いの担任で話し合い決めます。小学校が同じ子同士の交流を深める配慮をしています。
	サッカー教室 (年間2回春、秋)	4,5歳児 (同年齢)	同年齢でボランティアコーチより指導を受けています。
6月	異年齢交流週間	全園児	一日の生活場面でさまざまな異年齢で交流をします。
	祖父母招待の日 (年間1回)	全園児	子どもたちのおじいちゃん、おばあちゃんに保育園での生活や姿をご覧いただきます。
	保育参観	全園児	平日と土曜日の2日間、子どもたちの日頃の園生活や保育活動をご覧いただきます。今年度の保育は保護者参加型での保育を行ないました。
	お話し(読み聞かせ) 年間3回	異年齢児	0,1歳児、2,3歳児、4,5歳児でお話を聞きます。
7月	海遊び 川遊び(5歳児)	同年齢	2歳児から5歳児を対象に安全面を考慮し、同年齢のグループで行ないます。
8月	プール遊び	3,4歳児	赤間保育園の大型プールで同年齢のグループで水遊びを楽しみます。
	夕涼み会(保護者 会と合同主催)	全園児	全園児の家族を対象に夕方、保育園で軽食と飲み物で交流を深めます。
	異年齢交流週間	異年齢	一日の生活場面でさまざまな異年齢で交流をします。
9月	運動会	全園児	同年齢や異年齢をいろいろな場面で組み入れて行ないます。プログラムにおいても同様です。
10月	チャレンジキャン プ	5歳児	5歳児を2グループに分け、1泊2日で子どもと保育士だけの非日常体験型野外活動を行います。
	親子バス遠足	全園児	平日に全園児共に大型バスに乗って、野外で子と親と保育士がレクリエーションを楽しみ交流を持ちます。
11月	味噌作り	5歳児	5歳児を対象にJA宗像の方の指導を受け、作ります。
	七五三参り	2,4歳児	近くの浄蓮寺へでかけ、お参りをします。
12月	クリスマス発表会	全園児	年齢単位やクラス単位でプログラムを構成し表現活動を保護者の方に見て頂きます。
	異年齢交流週間	異年齢	一日の生活場面でさまざまな異年齢で交流をします。
	もちつき大会	異年齢	地域の方や保護者の方々の参加で一緒に杵や臼を使いもちをつきます。園児もあん餅を自分で丸めいただく。5歳児は餅つきの体験もやります。
1月	クリスマス会	異年齢	全園児でクリスマスの意味を知り、楽しく過ごします。
	総合縦割り保育 (2週間)	異年齢	全クラスで0歳児～5歳児までの異年齢児集団が共に生活を2週間行ないます。異年齢での生活を過ごし関わりを持つ環境を重要としているので行事は入れていません。
2月	節分	異年齢	節分の意味を知り、やさしい心を持ち続けられるように豆まきをします。
	保育参観	全園児	平日と土曜日の2日間子どもたちの現在の様子を参観していただいたり、参加型の保育を行なう。1年間の報告も兼ねてクラス懇談も行ないます。終了後講演会を組み入れる場合もあります。
	お別れ散歩	3,5歳児	5歳児とのお別れを兼ねて弁当を持って、近くの公園へ散歩に行き、楽しく遊びます。
	お別れ探検	4,5歳児	4,5歳児を3グループに分け3日間で4歳児が次年度に体験するキャンプの場所で5歳児が4歳児に火の起こし方や秘密の遊び場所などを伝授しながら楽しく過ごします。
3月	雛祭り	全園児	5歳児が飾ったひな人形を見ながらお祝いをします。
	卒園式	全園児	5歳児の卒園式が中心となるが全園児でお祝いします。

して最後までやり遂げることへの勇気と精神的に逞しく自立心が芽生えていることに気づかされる。

本格的に水の感触に親しむ海活動・川活動では、水という環境は子どもたちにとって五感を刺激する不思議な力がある。水に触れることで、五感という感覚を刺激し、子どもたちの小さな瞳が見て、感じて、触れてみることで感性という小さな芽が大きく膨らむ幼児期にとって必然性のある保育環境である。

#### 自由遊びにおいて

自由遊びでの子どもたちの様子は、異年齢での活動と同様に同年齢でのかかわりも見られ、遊びの種類によっては性差がはっきりと観察される。例えば、闘いごっこやスピードを競う二輪車競争、勇気が求められる高い木登り遊びなどアクティブでテクニカルな激しい遊びやサッカーや野球などのルール性のあるスポーツ遊びなどは同年齢の男児で活動する姿が多く見られる。女兒においては、ままごとなどのごっこ遊びやみたて遊びなどの象徴遊びなどは異なる年齢構成で遊んでいる姿がよく見られる。その他にも鉄棒やフープなどを使った遊びで、5歳児の女兒の姿に憧れる3、4歳児の女兒の姿があり、やさしく指導を受けながら挑戦し、できた喜びを共に共有する姿は女兒に多く見られる姿である。また、同年齢の遊びから異年齢への遊びに伝承する遊びに泥だんご作りがある。5歳児が泥だんごに適した土を見つけ、水の調合加減や上手な練り方の方法などを年下の子どもたちに上手な遊びかたの継承や伝承がみられる。その他にも絵本の読み聞かせでは、自分のひざもとに小さな子を包みこみながらいとしそうに読んであげている姿には、本当の兄弟以上の愛情深いかかわりを感じる。

異年齢保育では、他者を思いやる気持ちの他に自分の思いを周囲に合わせていく自己抑制としての関係性も重視される。年齢相応の自分の思いを全面に押し出して、自分らしさを思い通りに表現していく自己発揮する力は、自我の形成において重要であり、他者を競争相手として意識することは自我の形成においても大切な関係性でもある。自由遊びでドッジボールやバトンリレーなどクラス対抗や同年齢対抗などの保育活動を意図的に仕組むことにより、さまざまなトラブルや葛藤、競争心などライバル意識など人のかかわりのなかで、子どもたちが双方の立

場を理解し自己発揮しながらも認め合う関係づくりも大切な環境構成と考える。

#### (2) 指導計画の実施

縦割り保育の指導計画の考え方は、同年齢保育と基本的な枠組みは同じである。子どもは環境との相互交渉を通して、豊かな心情・意欲・態度を身につけ、新たな能力を獲得していく過程であることから、人との相互的なかかわりを深める中で信頼感や自己の主体性を育むことが大切である。0歳時から就学前の発達連続性を考慮して、1年間の生活を見通した発達や生の節目を考慮し、それぞれの時期にふさわしい保育の内容を計画し、1年間を4期にわけた期ごとにおける子どもの生活の流れや活動の内容、主たる行事や季節を取り入れた活動などの見通しを持って計画をたてる。具体的な保育目標に対して、異年齢保育か、同年齢保育課か、さらに活動内容による年齢別課題に取り組むのがよいのか検討する必要がある。

作成上での配慮は、子どもの発達の特長や道筋さらに生活の連続性に配慮して、乳幼児期の子どもたちの発達における身体的・精神的な年齢差・個人差があることを理解し、発達年齢の違う3歳から5歳児に共通する内容かどうか、年齢に応じた保育をどのように保障するのかなどの配慮も必要となる。縦割り保育では、子どもたちの園生活がより豊かに充実するために意図的で計画性のある保育を行う必要がある。計画の記録と実践の記録を照らし合わせ、自己評価、クラス評価に基づいて保育実践を振り返り、保育を評価し直すという過程（指導計画 実践 評価・改善 新たな指導計画）が求められる。保育は、たんに保育士だけが担うのではなく、園にかかわるすべての職員（保育士、栄養士、看護師、事務員、用務員、常勤・非常勤職員など）が職種や年齢を越えたつながりのもとに園の理念・目的を理解し、よりよき実践者、担い手としての自覚と専門性が求められる。長期的な指導計画（年間計画、月案など）と関連させながら、子どもの生活に即したより具体的で短期的な指導計画（週案、日案）が必要になる。

「生活・遊び」を基本として生活の流れを重視する異年齢保育においては、異なる年齢の子供たちが



遊ぶ時も、食べる時も、寝る時も共に過ごすなかで様々な学び合いがあり、さらなる生活の主体者としての自立に向かう環境づくりが重要である。

## 5. 異年齢保育の効果

### (1) 異年齢児とのかかわりが育てるもの

異年齢保育では、子ども同士の多様な関係性が生まれ、その相互の関係性の中で望ましい子どもの育ちが見られる。子ども、豊かな人間関係を育みながら、年齢を越えた関わりの中でお互いを気遣う社会的態度を身につける。相手を思い気遣う態度は、必ずしも年齢相互の関係だけでない。多様な関係性の中でハンディを抱える子どもたちに対する同様な気遣いも育ち、自分と異なる相手のことを自然に受け入れる態度が育つ。

年上から大切にしてもらった安心感や充実感は、大きな自信や自覚として積み重ねられ、自分は成長したという自覚や年長としての責任を感じるようになり、自己肯定感につながる。また、年長児が上手に遊ぶ姿は年少児のモデルとなり、「すごい、やってみたい」と知的好奇心や憧れを持つ動機となり得る。異なる年齢での集団生活を通して、日常での必要な生活のしかたや遊びのノウハウが、年長児から年少児へと情報や行動が伝達伝授され、教えたり教えられたり、助けたり助けられたりと異年齢児同士のかかわりを通して相手の気持ちを理解し、思いやる気持ちや他者を認める子ども同士の信頼関係が育まれていく。

このような異年齢保育活動を通して、子どもたちはどの年齢においても、お互いに刺激しあい、年齢の枠を超えたかかわりができるようになる。このように、慕い慕われる関係の中で、子ども同士が協力し合い、支え合う。子どもは、関わりを深めながら年齢を越えた関係性が育まれる。

### (2) 社会的態度と生活態度の育ちの評価

「思いやり観察項目」による評価

表4は、3, 4, 5歳児の各年齢について、他者に対する思いやり行動がどの程度評価されるのかを「思いやり観察項目」(千羽ら、2005)に新たな項目を追加し用いたものである。

「思いやり観察項目」 評定尺度

評定はそれぞれの項目を5段階で評定する。

5. 確かに見られる
4. かなり確かに見られる
3. ほぼ確かに見られる
2. あるように思う
1. まったく見られない

調査の概要は次の通りです。

・観察対象児と調査年月日

平成21年10月実施

5歳児26名

4歳児24名

3歳児20名



表4 思いやり観察項目

大項目	小項目		
相手の気持ちを汲もうとする表出	1、困っている子どもにやさしくする 2、他児にトラブルがあると気づかわしげにみる 3、困ったり悲しんでる人の様子を見て、声をかける 4、許してあげる 5、大事なものをゆずる 6、大事な役をゆずる	相手との関係を深めようとする表出	24、相手との関係をつけたり確かめたりするためにふざける 25、けんかをする 26、自分のとった行動についてどうしたらよいか気にしたり迷ったりする 27、トラブルをうまく收拾する
相手に気持ちを汲んでもらおうとする表出	7、許してもらおうとする 8、大事なものをゆずってもらおうとする 9、心配な気持ちをわかってもらおうとする 10、嫌な気持ちを素直に相手に訴えわかってもらおうとする 11、相手の了解をとる	相手の心に積極的に関心をもつ表出	28、相手の気持ちを積極的に聞く 29、ありのままを認める 30、相手の心を理解しようと考えたり質問したりする 31、痛みや喜びを感じ取り具体的にそれを伝える 32、相手の表情や行動を見て自らの行動を振り返り、相手の気持ちを知らうとする 33、自分ならこうすると判断して言葉で伝える
相手を援助しようとする表出	12、様子を見て助けてあげる 13、自ら他児の面倒をみる 14、先生に頼まれて、他児の面倒をみる 15、わからないでいる他児に教える		
みんなと協力しようとする表出	16、力を合わせてする作業に参加し全体の役に立つ 17、遊んでいるグループの世話をする 18、友だちを誘って、一緒に遊具を運ぶ 19、提案や意見を言って、みんなの協力を得る	その他	34、相手の身体などのハンディに気づき、自然に助ける 35、新しく入園・転園してきた子どもに対して、自分から役立とうとする 36、年下の子どもに対し、心づかいをする 37、けがなどをした動物の世話を懸命にする 38、飼育物の死を悲しみ、涙する 39、ニュースや読み物などで苦しんだり困っている人を見て同情し、涙ぐむ
相手と気持ちを共有する表出	20、友だちの病気やけががよくなると喜ぶ 21、友だちが悲しそうだったら悲しくなる 22、いじわるされた子どもと一緒に怒る 23、相手の行動に感心し心から喜ぶ		

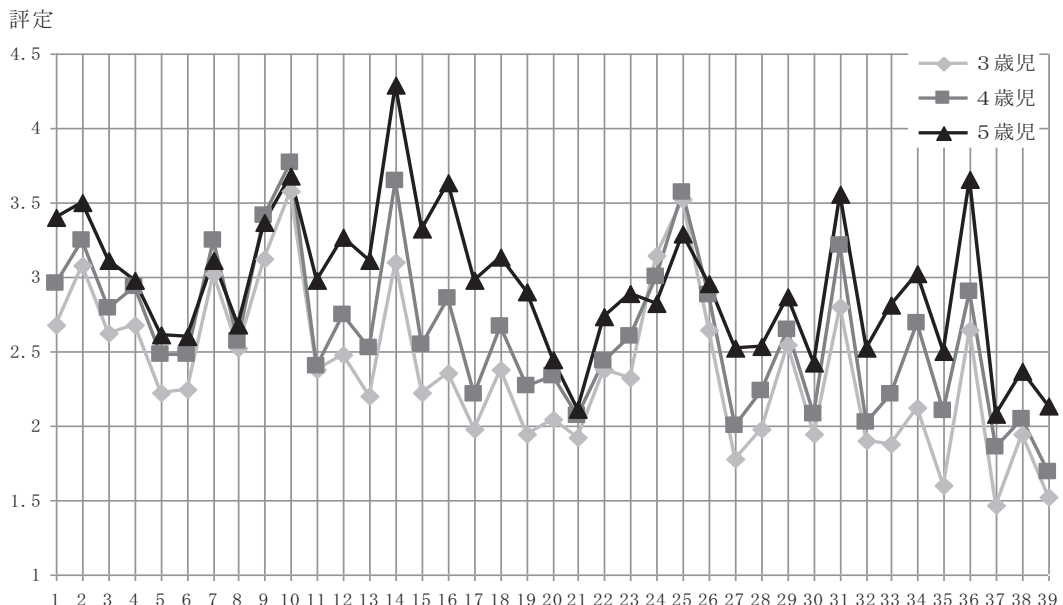


図1 各年齢項目別平均点グラフ

項目

- ・観察者および評定者

3年以上の保育歴をもつ各クラスの担任保育士

- ・評定の方法

39の「思いやり観察項目」を5段階の評定尺度により、担任保育士が評定する。

- ・評定の処理

年齢ごとに、項目の評定を集計し、平均点を算出する。

図1は、「思いやり観察項目」を用いて、他者に対する思いやる行動を年齢別に評価したものである。最初に、各年齢別での「思いやり観察項目」の表出結果を見てみると、39項目中35項目において5歳児が他の年齢よりも高い評価を示している。4歳児について見てみると5項目において他の年齢より高く、3歳では、他の年齢よりも高い評価項目は1つであった。

このことから、5歳児についてはそのほとんどの子どもが3歳の時から異年齢保育を経験しておりそれぞれの年齢時に経験した縦の人間関係のなかで育まれた結果ではないかと考えられる。4歳児は、1年半経験した異年齢保育を通して培われた他者との関係のなかで相手を思いやる行動が見られる。3歳児においては、まだこの年齢の特性である自己中心的な思考に基づく行動が中心で他者に対するかかわりはまだまだ難しいことが示唆される。次に、各年齢別の項目について見ると、5歳児についてはほとんどの項目が4歳児よりも上回っており、4歳児よりさらに相手を思いやれる行動がみられる。特に、項目14番「先生に頼まれて他児の面倒をみる」がすべての項目において高い評価を示しており、項目13番「自ら他児の面倒をみる」、項目36番「年下の子どもに対し、心づかいをする」などの項目についても評価が高いことから、5歳児については、他者に対する相手への気遣いや思いやりを具体的に行動に移すことができると考えられる。また項目10番「嫌な気持ちを素直に相手に訴えわかってもらおうとする」、項目25番「けんかをする」の項目について、3、4歳児よりも評価が低いことから善悪などものごとに対する道徳的な規範意識が他の年齢よりも高いことが示唆される。項目との関係で見ると、項目25番「けんかをする」が他の年齢と比べて5歳児が一番低く、反対に項目27番「トラブルをうまく收拾する」が他の年齢より高いことから、実際にけんか

やいざごの状況において保育者が関与しなくても子ども同士で時間はかかっても解決しようとする姿が実際に多く観察された。4歳児においては、項目7番「許してもらおうとする」、項目9番「心配な気持ちをわかってもらおうとする」、項目10番「嫌な気持ちを素直に相手に訴えわかってもらおうとする」、項目25番「けんかをする」などの項目から、友だちとの仲間関係を深めようとする反面、仲間関係において自我をとおそうとしてけんかなどのいざごも経験しながら、相手を認め気遣う姿も見られ、自我の形成において他者を理解しようとする心の葛藤をくみ取れる年齢でもあることが示唆される。また、項目14「先生に頼まれて他児の面倒をみる」の項目においては5歳児と同様に高い評価がなされていることから、年下やお友だちに対して思いやる気持ちが現れ始めていることが示唆される。

しかしながら、項目13番「自ら他児の面倒をみる」の項目については平均的な評価であることから、保育士に示唆されれば他児にかかわろうとする姿勢も同時に伺える。園生活において、園外活動で5歳児が不在のときに4歳児が年長児としてリーダーシップを発揮する姿がみられ、このことは、5歳児に代わってお世話をするんだという自覚や責任感といった意識が芽生えている証しだと考えられる。異年齢保育での4歳児の存在は、年上との関係（年上への憧れとライバル視）、そして年下との関係（年上としての自覚と責任）などそれぞれの年齢間での関係において年上への憧れや年下に対する我慢したり気持ちを抑えたりと年齢の狭間で葛藤を感じている時期だと考えられる。このことから、保育者は、子どもの成長・発達において、心の変化の著しいこの年齢の時期の子どもたちの心の状態をよく理解し、異年齢保育での4歳児の存在に対して、保育士が過度な役割意識や期待を抱くのではなく一人ひとりに向けたやさしいまなざしと援助が必要であることが示唆される。3歳児においては、ほとんどの項目について4、5歳児よりも評価が低く、なかでも項目37番「けがなどをした動物の世話を懸命にする」と項目39番「ニュースや読み物などで苦しんだり困っている人を見て同情し、涙ぐむ」については、特に低い評価だった。これらの項目については、他者を十分に受容できる年齢ではなく、年齢相応であると考えられる。

また、小動物に対するかかわりについては、実際に保育の場面において3歳児男児がクラスで飼っていたザリガニのはさみをもぎ取ったり、他の3歳児男児が金魚鉢の中に大量の砂を入れたりといくつか出来事があった。園生活においては、子どもたちが日頃から小鳥、金魚、カメなどのお世話や昆虫などの飼育を通して生き物とのかかわりは体験しているものの、他者のかかわりと同様に命に対する感情がまだ未分化で未熟ゆえな行動だと考えられる。項目35番の「新しく入園・転入してきた子どもに対して、自分から役立とうとする」についても低い評価から見ても、3歳児はまだ相手を思いやるといふ他者との関係を認識し、人間関係をきずくのは難しいことが考えられ、反対に項目24番「相手との関係をつけたり確かめたりするためにふざける」や項目25番「けんかをする」などの項目から他者との関係においてはコミュニケーション能力が未熟なため、けんかやいざこざなどのトラブルにつながりやすく、相手の立場を理解することはまだ難しいことが示唆される。このことから、3歳児の課題として、生活や遊びなどより豊かな異年齢でのかかわりを通して他者との関係を深めていく配慮が必要であることが示唆される。

#### 「生活に必要な習慣項目」による評価

生活に必要な生活習慣能力について、子どもたちがどの程度習得しているのかを保育形態の違う二つの保育園、赤間保育園（同年齢保育形態）と第二赤間保育園（異年齢保育形態）の3歳児、各20名、計40名を対象に評価をおこなった。表5は、生活に必要な習慣項目について「子どもの園生活と成長の姿」（田中ら、2000年）の「生活に必要な習慣」に新たな項目を追加し用いたものである。

「生活に必要な習慣項目」評価尺度はそれぞれ項目を以下の5段階で評価する。

5. 確実にできる
4. かなりできる
3. まあまあできる
2. あまりできない
1. まったくできない

調査の概要は次の通りで。

- ・観察対象児と調査年月日  
平成21年10月実施

赤間保育園 3歳児20名

第二赤間保育園 3歳児20名

・観察者および評定者

3年以上の保育歴をもつ各クラスの担任保育士

・評定の方法

73の「生活に必要な習慣項目」を5段階の評価尺度により、担任保育士が評価する。

・評価の処理

年齢ごとに項目の評価を集計し平均点を算出する。

図2は、それぞれの保育形態の違う保育園の3歳児各20名について生活に必要な習慣73項目について評価した結果である。その結果、73項目中54項目において異年齢保育での3歳児が同年齢保育形態の3歳児よりも評価が高いことが示唆された。詳細に見てみると項目5「食事中は席を離れないで食べる」、項目7「椅子やテーブルの下にこぼした食べ物を拾う」、項目10「自分が使った食器を片付ける」、項目14「牛乳を自分でコップに注ぐ」の食事に関する項目について2つの園で大きく差があるが、これは同年齢のみで食事をする赤間保育園と3、4、5歳児が異年齢で食事をする生活環境の違いによるものと考え



表5 生活に必要な習慣項目

	評価項目	評価	評価項目	評価
1	食事の前に手を洗う	38	顔を洗ってふく	
2	スプーン、フォーク、箸を献立に合わせて使い分ける	39	シャワーの後など、自分で髪の毛や体をタオルで拭く	
3	箸が正しく持てる	40	遊びに夢中になってもおもらしをしない	
4	食器や箸をきちんと持って食べる	41	パンツをぬらしたら、自分で着替える	
5	食事中は席を離れないで食べる	42	男児用と女児用のトイレが区別できる	
6	自分でこぼしたものをふきんで拭き取る	43	膝まで、あるいは全部脱いで排泄ができる	
7	椅子やテーブルの下にこぼした食べ物を拾う	44	パンツを脱がずに大小便ができる	
8	だいたいこぼさないで食べる	45	自分でおしっこに行き、大人の世話はほとんどいらない	
9	言われなくても、食事のあと口の周りをぬぐう	46	自分で大便の後始末ができる	
10	自分が使った食器を片付ける	47	排泄のあと、言われなくても手を洗う	
11	ハンカチ結びができる	48	トイレのスリッパに履き替えてトイレに行く	
12	ハンカチ結びをほどく	49	排泄のあと、トイレの水を流す	
13	ご飯をおひつからよそう	50	トイレのスリッパを並べて出てくる	
14	牛乳を自分でコップに注ぐ	51	こわれたガラスや針などが危険だとわかる	
15	大皿から自分の皿に食べ物をとる	52	友だちののっているブランコの前後に立たない	
16	嫌いなものでも頑張っておく	53	前の友だちが滑り終わるまで、滑り台を滑らない	
17	長いズボンが一人ではける	54	飛び降りたら危険な高さがわかる	
18	洋服の袖を正しく通す	55	避難訓練で、先生の指示通り行動する	
19	前のボタンが一人でははずす	56	水道の蛇口をまわして、水の調節ができる	
20	前のボタンが一人ではめる	57	髪の毛をゴムで結ぶ	
21	ファスナーを上げ下げできる	58	雑きんやタオルを絞る	
22	ファスナーをセットできる	59	ほうきで掃除する	
23	ホックの着脱ができる	60	鉛筆などが正しく持てる	
24	上着を一人で着る	61	布団を敷く	
25	ひもで蝶結びができる	62	布団をたたむ	
26	ひもで蝶結びがほどける	63	シーツカバーをかける	
27	脱いだものをハンガーにかける	64	シーツカバーをはずす	
28	洋服を脱いだあと自分できちんとたたむ	65	使った後、用具を点検して数を確かめる	
29	靴の左右がわかる	66	自分の帽子や物を置く場所がわかる	
30	暑く感じたら自分で上着などを脱ぐ	67	自分の靴を靴箱に片付ける	
31	服がぬれたら自分で着替えようとする	68	自分のものと他人のものが区別できる	
32	汗をかいたら自分で着替える	69	遊んだ後の遊具を片付ける	
33	気温に応じた衣服が選べる	70	自分から、遊んだ後の自分の遊具を片付ける	
34	手が汚れると自分で洗い、拭く	71	自分の片づけが終わっても、友だちの分まで手伝う	
35	手洗いは、手のひらだけでなく、手の甲や指の間も洗う	72	紙くずなどが落ちていたら拾う	
36	自分で気づいて鼻をかむ	73	各クラスのごみをゴミ袋に集める	
37	うがいと口すすぎの違いがわかり、正しく行う			

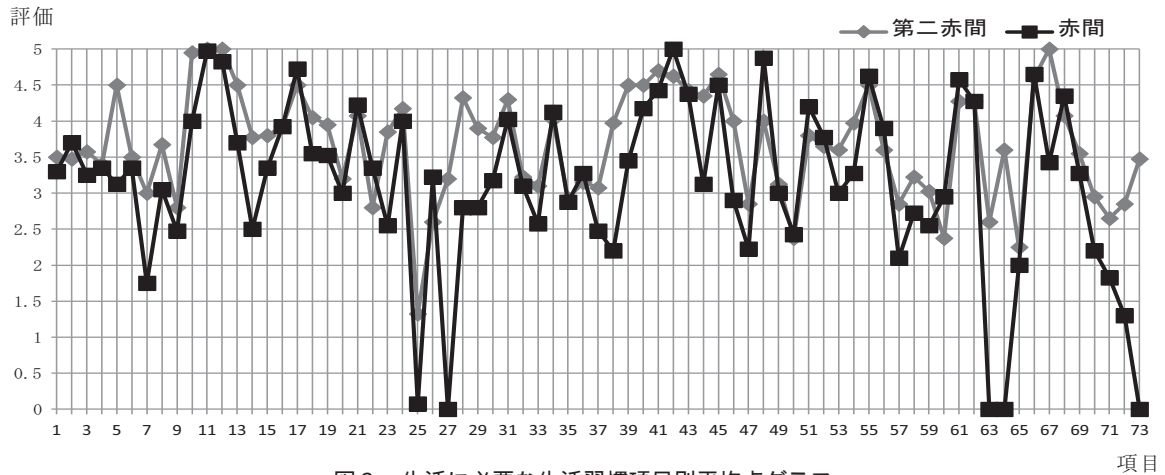


図2 生活に必要な生活習慣項目別平均点グラフ

えられる。このことは、異年齢の生活の中で必然的に年長児からの刺激を受け模倣する場面が多くあるからだと考えられる。今回の生活習慣能力の結果を評価から見ると、評価の2、5をクリアしていない項目は同年齢では14項目あり、異年齢では4項目であった。又、評価3をクリアしていない項目は同年齢では23項目あり、異年齢では14項目であった。そのうち共にクリアできていない項目は「25. ひもで蝶結びができる」であり、逆に共にクリアできている項目は「ハンカチ結びができる」であった。ハンカチ結びは同年齢でも異年齢でも毎日の生活の中で必要な生活習慣であり、互いに2歳児の頃から経験していた結果であることが分かる。反面、ひもでの蝶結びは4、5歳児でも難しさがあり、当園においては5歳児の当番活動の時、ランチルームでの配膳時にエプロンのひもを5歳児が結ぶことができる生活環境があるからである。3歳児の成長・発達の特徴から「依存から自立」へ「受動から能動」へ移行する時期であり、子どもたち自信は自分から何でも挑戦しようとする姿が見られ、今まで親や保育士に依存しそのかかわりを中心としていた行動から一人で行動しようとし、自我が今まで以上にはっきりとしていく。この成長・発達の特徴をしっかりと理解した上で保育士は手を出すだけの援助から、子どもを信じ見守り、励ます援助を増やすことが、ここでの自立心の育みに繋がると考えられる。子どもたちはどんなに難しいことでも自分がやりたいと思うことは目を輝かせ挑戦しようとする。このようなときには「危ない」「やってはいけない」と安易に制するのではなく、まずはやってみることからでき

るに繋ぐことが大切であり、そのことが生活習慣能力として自身のものとなると考えられる。

## 6. 異年齢保育実践の課題

異年齢保育形態での保育環境のなかで、一人ひとりの子どもたちが年齢を越えてかかわる姿は十分見られるものの、各年齢の子どもの育ちについての正しい理解とその評価について弱いことが指摘される。

また、各年齢に見合った環境構成（各年齢での発達課題である知的好奇心を満たす物的環境の構成や同年齢での学習環境）の在り方や年間カリキュラムの在り方にも課題があることが理解された。

このことから、0歳から5歳まで各年齢の発達の連続性を考慮して異年齢保育の環境構成の在り方について取り組んでいく必要がある。

## 引用・参考文献

- 岡本依子 共著 2004 『エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学』新曜社
- 斎藤桂子・米山千恵・渡辺幸子 編著 2002 『異年齢クラスの楽しい遊びと生活』明治図書
- 千羽喜代子 共著 2005 『思いやりが育つ保育実践』萌文書林
- 高橋美栄子・藤戸純子 編著 2002 『コミュニケーションの力を育てる異年齢保育』エイデル研究所
- 田中敏明 編著 1997 『新しい保育 理論と実践』ミネルヴァ書房
- 田中敏明 編著 2000 『子どもの園生活と成長の姿 3歳から6歳まで』ミネルヴァ書房
- 森上史朗・吉村真理子・後藤節美 編著 2006 『保育内容「人間関係」』ミネルヴァ書房
- 全国保育士会 藤岡佐規子他 著 2001 『ハンディー保育所保育指針』全国社会福祉協議会